

今週の為替相場見通し (2017年8月21日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.61 ~ 110.95	109.20	107.50 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.1662 ~ 1.1838	1.1760	1.1400 ~ 1.1850
(1ユーロ=)	(円)		127.57 ~ 130.39	128.46	127.50 ~ 129.50
英ポンド	(ドル)		1.2832 ~ 1.3022	1.2874	1.2760 ~ 1.2930
(1英ポンド=)	(円)	*	139.79 ~ 143.20	140.44	139.90 ~ 142.30
豪ドル	(ドル)		0.7808 ~ 0.7962	0.7926	0.7800 ~ 0.8000
(1豪ドル=)	(円)	*	86.00 ~ 87.56	86.57	85.00 ~ 88.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 和地 淳史

(1) 今週の予想レンジ: 107.50 ~ 111.00 円

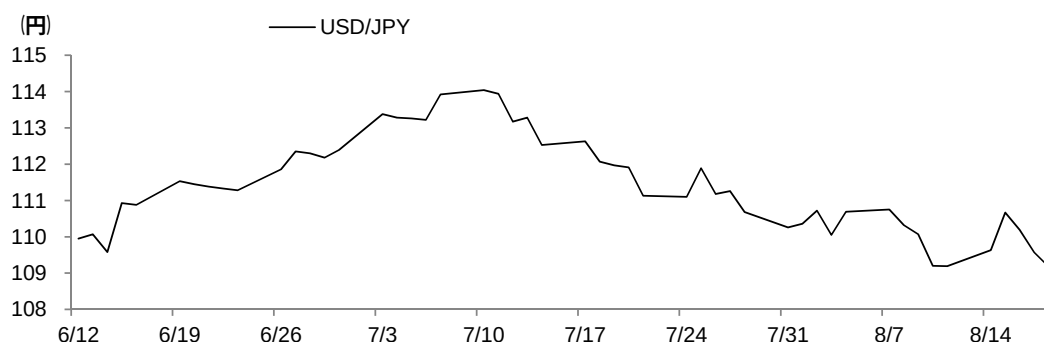
(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のドル/円相場は、週後半に下攻めする展開。週初14日に109円台前半でオープンしたドル/円は、北朝鮮情勢に対する過度な警戒感が後退したことで買い戻された。その後、ダドリーNY連銀総裁が「年内にもう一回利上げすることが好ましい」と発言したことで、109円台後半まで上伸した。15日も株が堅調となったことを背景にドル/円は110円を回復。また、米7月小売売上高などの経済指標が市場予想より良好な結果となったため、110円台後半まで上昇する場面が見られた。更に、16日にはお盆明けで実需勢のドル買いが強まったことから一時週高値となる110.95円をつけた。しかし、トランプ米大統領が米主要企業トップで構成する助言組織の解散を宣言したことで、反落。また、FOMC議事要旨で低インフレの状況に関して更に懸念する発言が見られたことでドル売りの流れとなった。ドル/円は、17日には109円台後半まで下落。その後、ECB議事要旨でのユーロ高懸念を受けたドル買い戻しなどを背景に一時反発する動きも見られたものの、米国家経済会議のコーン委員長が辞任するとの報道を受けて、再び109円台後半へ。その後、誤報と判明して多少買戻しも見られたが、バルセロナでのテロを受けて結局リスクオフの展開となった。18日には世界的に株が下落する中、ドル/円は一時週安値となる108.61円まで下げ幅を拡大。しかし、米8月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想を上回ったことで反発。更に、白人主義者と批判されていた米主席戦略官バノン氏が解任との発表をきっかけとしてリスクオフの動きが後退すると109.60円まで一時上昇し、109.20円で越週となった。

今週のドル/円相場は、上値重い展開を予想。低インフレで米金利の上昇が見込みにくい中、政権からの離反や暴動で強まるトランプ大統領への不信感に加えて、北朝鮮ミサイル発射や欧州テロなどによる地政学的リスク上昇を背景としてリスクオフの動きが強まりやすい状況。下値では実需や投資家による押し目買いの動きも見られるものの、徐々に買い圧力をこなして上値を切り下げている。今週は24日(木)からジャクソンホールでの経済シンポジウムが開催される。注目は25日(金)でのドラギECB総裁とイエレンFRB議長の講演。ただし、ドラギ総裁は新たな政策メッセージは示さないと既に報じられていることやイエレン議長も金融安定をテーマにした講演を行うことに鑑みれば、基本的には市場の反応は限定的となり、先週後半の流れを引き継いで米金利は低下基調か。また、ドルインデックスも94付近が強いレジスタンス水準となっている状況であり、ドル買いは期待しにくい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き: 安値 108.61 円 高値 110.95 円 終値 109.20 円



(資料) ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1400 ~ 1.1850 127.50 ~ 129.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は小幅ながら下落した。対ドルでは、週初14日に1.18台前半でオープン。週高値1.1838をつけるも、発表されたユーロ圏6月鉱工業生産が予想を下回ると1.17台後半まで下落。翌15日、発表された米7月小売売上高や米8月NY連銀製造業景況指数が予想を大きく上回ったことからドル買いが進むと、1.16台後半まで下落した。週央16日には1.17台を回復して推移していたものの、ECB報道官から「ドラギECB総裁はジャクソンホールで新たな政策メッセージは発表しない」とのコメントが報じられると再び1.16台後半まで下押しした。翌17日、発表された米FOMC議事要旨においてFRBメンバーがインフレ見通しに対して強気になれない状況が垣間見え、ドル売りが進行。1.17台後半まで反発するも、発表されたECB議事要旨でECBが年初からの大幅なユーロ高について懸念していることが明らかになると週安値1.1662まで下落。週末18日、米金利の低下とともに再びドル売り地合となると1.17台後半まで上昇したが、バノン米首席戦略官解任との報道でドル買い優勢となり、1.17台半ばで越週した。対円では、週初14日に129円台前半でオープン。17日にドル/円が週高値まで上昇する中、ユーロ/円は130.39円の週高値をつける。週末18日、ドル/円が週安値をつけるとユーロ/円も週安値127.57円をつけ、128円台半ば近辺で越週した。

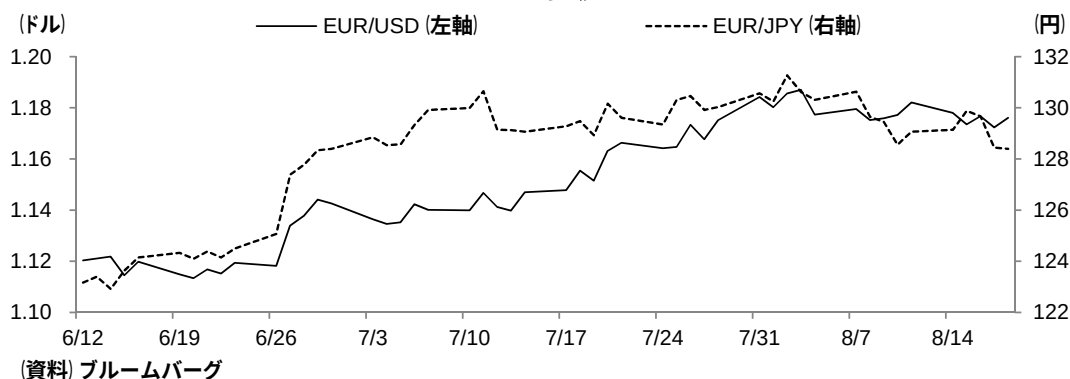
今週のユーロ相場は軟調な展開を予想。先週ECB報道官からドラギ総裁によるジャクソンホールでの新しい政策メッセージ発表を否定するコメントが出た際、ユーロは下落したとはいえその動きが小幅であったことは印象的だった。市場にはECBによるテーパリングに対して期待する向きが残存しているように感じる。確かに、足許のインフレ指標ではユーロ圏7月コア消費者物価指数(HICP)のように予想を上回る結果も出ているが、単月の結果でECBがテーパリングを決断するとは思えない。寧ろECB内では年初来続くユーロ高を懸念している声があることも議事要旨から分かっており、やや市場がECBによるテーパリングに対して楽観的になり過ぎているようにも感じる。斯かる中、今週はジャクソンホールでカンザスシティ連銀主催のシンポジウムが行われる。ドラギ総裁が新しい政策メッセージを発しないとしても、現状の為替水準についての認識に言質を与えること(一段のユーロ高は警戒するなど)があれば、相場の動因となり得よう。また同シンポジウムではイエレンFRB議長の発言も注目される。強弱混在する直近の米経済指標の結果を踏まえても年内追加利上げに意欲的な姿勢を見せれば、利上げを折り込みに行く形でドル買い優勢となりそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1662 高値 1.1838 終値 1.1760

(対円) 安値 127.57 高値 130.39 終値 128.46



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2760 ~ 1.2930 139.90 ~ 142.30 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、下落。ただし、対ドルでは週前半に水準を切り下げ、その後週引けまで安値圏に膠着、対円では逆に週後半に水準を切り下げ、対ユーロでは週前半に下押し後、狭い値幅を上下しながら週引けまで軟調推移と値動きは分かれた。15日に発表された英7月CPIが小幅ではあるが市場予想を下振れた事実が、この間のポンド軟調の一因であったことはほぼ間違いなからう。ただ、上述の通り、この数字を受けてポンドが売り込まれたのは主に対ドルだけで、対円、対ユーロなどでは一時下押しした程度で明確に水準を切り下げるには至らなかった。物価の小幅下振れが英中銀による追加利上げ観測を後退させ、ポンド安を招いたというのなら、16日に発表された英4～6月失業率(ILO基準)の予想外の小幅低下や同平均賃金の小幅上振れがポンド反発を招いても不思議ではなかったはずだが、ポンドの反発はやはり小幅、かつ一時的にとどまった。結局、15日のポンド/ドルの下落には、ニューヨーク連銀ダドリー総裁の今年3回目の利上げを示唆する発言や、同日発表されたニューヨーク連銀8月製造業指数の上振れなどを受けたドル高の影響の方が大きかったようだ。週引けに掛けてのポンド/円の下落も、円全面高の結果。円は世界的な株価一段安と並行して上昇し、リスク回避の一環と位置付けられた。リスク回避の要因には、17日、トランプ米大統領が自身の設置した製造業諮問委員会と戦略・政策フォーラムを解散したことなどで、経済政策運営の先行きに不安感が広がったことや、17日、バルセロナなどで起きたテロ事件などが挙げられた。

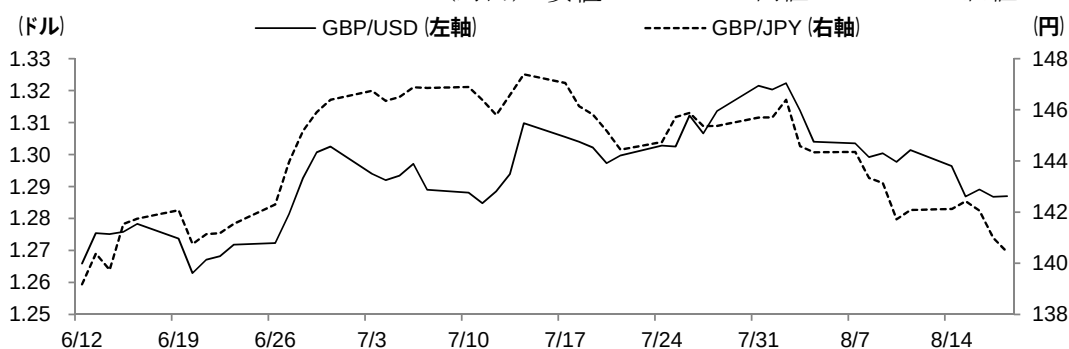
今週の英ポンド相場は、下押しを警戒しながら、方向感を欠いた横這いを中心に予想。金融市場の注目は24日から始まるカンザス連銀経済シンポジウム(於ジャクソンホール)、特に24日(木)の米連銀イエレン議長講演、25日(金)の欧州中銀ドラギ総裁講演に集まっている。現在までに、両議長・総裁共に金融政策に関する具体的で目新しい情報発信があるとの期待感は低下しているものの、そうは言っても様子見を決め込む言い訳ぐらいにはなるのではないかと。英固有の要因では、来週月曜日(28日)から始まるEUとの3回目の離脱交渉を前に、交渉の混迷が深まる可能性に注意。ポンド下押しを警戒するのもそのためだ。先週、英政府は「将来の税関手続きについて」(15日)、「北アイルランドとアイルランドについて」(16日)の政策文書を相次いで公表した。税関手続きについては、①高度に簡素化された手続き、もしくは②革新的で前例のないEUとの業務提携の可能性を提言。北アイルランド/アイルランド国境に関しても、物理的な国境は設けない、中小企業の通関手続きの減免を(EU側に)求める方針などを示した。英産業界などからは英政府から漸く離脱方針を巡る「具体的なたたき台」が示されたことや、正式に「移行期間」の設置を提案したことなどを好意的に受け止める声が聞かれたものの、一連の提案が現実的/実現可能か否かという判断以前に、そもそも「具体的」と言えるのかどうかすら定かではない。EU側の正式な対応は、おそらく28日からの交渉で明らかにされるのであろうが、既に「離脱後の在英EU市民/在EU英市民の権利」「離脱に際し英がEUに支払う金額」「アイルランド国境問題」の3点に関する交渉が十分に進展しない限り、離脱後の通商関係や移行期間に関する交渉は始められない旨、重ねて強調されており、今後も交渉の難航が予想される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/14～8/18)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2832 高値 1.3022 終値 1.2874

(対円) 安値 139.79 高値 143.20 終値 140.44



(資料) ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の見通しレンジ: 0.7800 ~ 0.8000 85.00 ~ 88.00 円

(2) ポイント(先週の回顧と今週の見通し)

先週の豪ドル相場は往って来いの展開となった。週初14日に0.78台後半で始まり、一時0.79台まで買い進まれたが、予想より弱い中国経済指標の結果を受け再度0.78台後半へ小幅下落。その後のNY連銀タドリー総裁の発言『年内あと1回の利上げの可能性』に反応しドル買いが見られ、豪ドルは0.78台半ばまで下落した。15日は豪州準備銀行(中央銀行、RBA)政策理事会議事要旨が発表されたが、更なる豪ドル高に対する懸念を示した予想通りの内容で動意はないものの、0.78台半ばから徐々に0.78台前半へ小緩んだ。その後、米8月NY連銀製造業指数や米7月小売売上高などの予想を上回る結果となった米経済指標を受けドル買いが見られ、週安値0.7808まで下落する場面もあった。16日はFOMC議事要旨の発表待ちで0.78台前半で小動き。0.78台半ばまでやや買い進まれた後、FOMC議事要旨で弱いインフレへの懸念が強まったため、市場は米国の12月利上げ先送りの可能性も出てきたことからドル売りの流れが強まり、豪ドルは0.79台前半まで上伸し高値圏引けとなった。17日は0.79台前半で取引が始まり、豪7月雇用統計で就業者数予想(+20千人)を上回る+27.9千人との結果を受け、週高値0.7962へ上昇。豪ドル/円も週高値の87.56円まで値を上げた。しかしこの水準では上値が重くなり、またスペインでのテロ報道を受けてリスクオフとなり豪ドルは0.78台後半へ値を下げる展開となった。18日は、0.78台後半で推移していたが、海外時間に入り0.79台前半まで買い戻された。一方、ドル/円がリスクオフの流れから一時109円台を割り込んだため、豪ドル/円は週安値86.00円まで下落する場面も見られた。その後トランプ米大統領の側近であるバノン主席戦略官が退任するとの噂が流れるも(その後正式発表)、0.79台前半で方向感出ず。結局、対ドル0.7926近辺、対円86.55近辺で越週した。

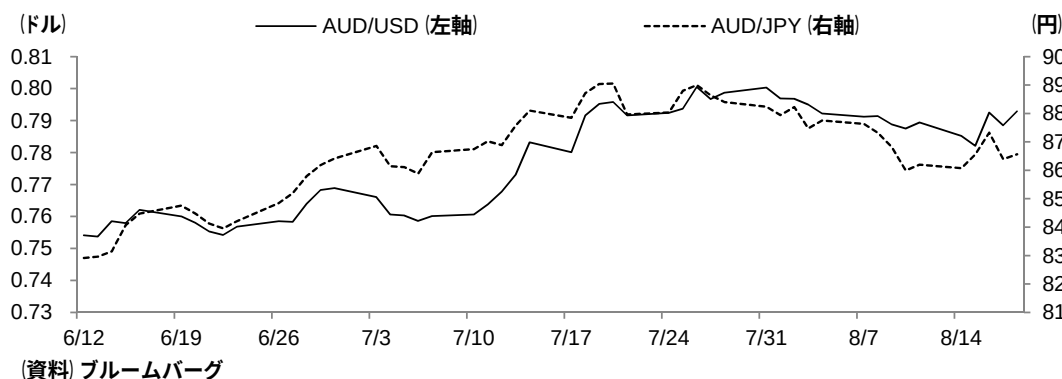
今週の豪ドル相場は方向感なくもみ合いの展開を予想する。豪州では特段指標の発表もない週間であり、RBA高官の発言や国内外の政治動向に左右される展開が見込まれる。米国で開催される注目のジャクソンホール会議(現地時間24日(木)~26日(土))は、イエレンFRB議長、ドラギECB総裁ともに講演のテーマに沿った内容を話すと報じられており、相場の材料とはならない可能性がある。引き続き、トランプ大統領関連のヘッドラインや北朝鮮リスク、欧州でのテロなどの地政学リスクが重石となり、豪ドルの上値は重いと予想する。一方で、上昇基調にある資源価格がサポート材料。足許では原油価格がやや下落し調整局面入りしているため、豪ドルもやや上値重く推移しているが、回復基調にある資源価格を前提とすれば豪ドルを大きく売することは難しく下値は限定的と思われるため、0.79ちょうどを挟んだレンジ推移が基本線となろう。豪州、同国と関連の深い中国では主要経済指標の発表の予定はない。米国では、25日(金)に7月耐久財受注(速報値)が発表される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/14~8/18)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7808 高値 0.7962 終値 0.7926

(対円) 安値 86.00 高値 87.56 終値 86.57



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。